

清流



第1特集

記憶のふしぎ

第2特集

やわらかな輝き 銀をめぐりて

「奇跡の一本松」のその後を知っていますか? 安芸倫雄

- 桐山秀樹
- 徳岡孝夫
- 林寧哲
- 中村重信
- 鹿島茂
- 木村紀子
- 金子由紀子
- 小山明子
- 松井今朝子
- 藤田智
- 廣瀬郁実
- 安部朱美
- 進藤春雄
- 田中優子
- 鎌田實
- 三遊亭小円歌
- 吉沢久子
- 今村彩子
- 末盛千枝子
- 阿部絢子
- 楊逸
- 鈴木皓詞
- 小池昌代
- 前野隆司
- 津田理恵子
- 清川妙
- 清水市代
- 榎本博明
- 石井英夫
- 渡部陽一
- 村上信夫
- 東野珠実
- 伊藤智也
- 金澤翔子
- 結城昌子
- 森田敏隆

ろう者と社会の架け橋となる映画を撮り続けたい

今村彩子さん



「珈琲とエンピツ」という一人のろう者の日常を淡々と綴ったドキュメンタリー映画が評判を呼んでいる。

聴者とう者に限らず、人と人が仲よくなるために

一番大切なことは何なのかを伝えてくれるこの映画を撮ったのは、

三三歳の気鋭の映像作家・今村彩子さんである。

「今日、波に乗った？」

映画「珈琲とエンピツ」の主人公は、静岡県でサーフショップを営んでいる太田辰郎さん（五〇歳）。悠揚とした風貌と、とびきりチャーミングな笑顔で客を迎える。自らも愛飲のハワイ産の豆を使ったコーヒーを注いだカップを客の前に置き、にっこり笑って、「どうぞ」のジェスチャーをする。そして、きれいに削った鉛筆で、さらさらっと紙に書く。

「今日、波に乗った？」

太田さんは、ろう者なのだ。つまり、客の声が聴こえない。机にはこんなメッセージボードが立ててある。

「いらっしやいませ 私は耳が不自由です ご用件はメモに書いてください」

そんな太田さんの日常を二年にわたって撮り続けた今村彩子さんもまた、生まれつきのろう者である。耳につけた補聴器は、音の有る無しを知らせる手助けとなっている。

「私は、聴者の人たちとコミュニケーションが取りにくいことにずっと悩んできました。でも、太田さんは聴者であろうと、初対面の人であろうと、誰とでもすぐにコミュニケーションを取って、冗談を言って笑い合う。なぜ、聴こえる人たちとあんなに楽しく話せるの？ その衝撃が、このドキュメンタリーを撮ろうと思ったきっかけでした」

いまむら・あやこ ●昭和54年、愛知県生まれ。映像作家。名古屋学院大学および愛知学院大学の非常勤講師。愛知県立豊橋雙葉学校高等部卒業、愛知教育大学教育学部卒業。カリフォルニア州立大学で映画制作を学んで帰国後、映画制作活動に入る。平成23年に制作したCM「伝えたい」が第48回ギャラクシー賞・CM部門の選奨となる。公式ホームページは、<http://studioaya.com/>

文 佐竹茉莉子

「悩み続けた」「暗い女の子だった」というのが信じられないほど、自然体の柔らかい笑顔で、今村さんは語る。

洋画ビデオが元気をくれた

今村さんが「映画を撮りたい!」と思ったのは、小学校三年生のとき。「小さいときは活発で負けず嫌い。相撲も強くて走るのも速かったから、人気者でした。自分だけが、聴こえない」ことに、とくに違和感を感じずに普通の小学校に入ったのですが、三年生くらいになると、友だち同士の会話も複雑になってくる。みんなが話していることがわからなくて、「何、何?」って何度も聞き直すと、相手が面倒くさいなと思ってしまうのが、表情から読めてしまつて。会話がわかってないのにわかつたふりをするようになってきました。苦しかった」

家で両親や弟と一緒にテレビを観ていても、みんなが笑って盛り上がるときに、自分は取り残される。「学校でも、家でも、孤独でした」そんな娘のために、父は字幕付きの洋画ビデオを毎日のように借りてくれた。アクション映画に夢中になり、「E.T.」では宇宙人と少年の友情に心が震えた。「映画がこんなに人を元気にする力

をもっているのなら、私も映画を作る人になろう!」と思った。その決意は高校生になっても揺らぐことはなかった。アメリカで映画作りを学びたいと言うと、両親は、親心から異国での暮らしに猛反対。だが、意志の変わらない娘を見て、「まずは日本の大学で勉強してから」と助言した。

地元の大学に入学した今村さんは、英語を勉強し、一年後の一九歳のときに、企業の助成を得てカリフォルニア州立大学に留学。照明、ビデオフィルムの扱い方からシナリオの書き方など映画制作の基本、さらにはアメリカ手話も学んだ。

「アメリカでは、聴こえないと告げても、日本と違って、相手は距離を置かないし、構えない。多民族・多言語の国なので、ろう者に対しても『手話を使う人』という見方なんです。授業を理解するうえで当然の権利として、無償で手話通訳もつきまします。『ああ、自分は自分のまま



太田さんのお店には、このようなお客さんへのメッセージが置いてある
写真提供=Studio AYA



心をこめて入れたコーヒーと笑顔で、お客さんとのコミュニケーションが始まる
写真提供=Studio AYA



「珈琲とエンピツ」の主人公・静岡県でサーフショップを営む太田辰郎さん取材する今村さん
写真提供=Studio AYA

でいていいんだ」とやっと思えるようになり、心がラクになりました」

偏見は、知らないことから生まれる

帰国後、デジタルビデオでまず撮ろうと思った題材は「ろう学校」だった。

「ろう学校の子どもたちは、聞こえない世界が自分たちの当たり前前日常だから、その世界で子どもらしく思いきりはじめて生きています。その日常をビデオに撮って手話サークルの人たちに観てもらったら、『イメージと違って明るくてびっくりした』と言われました。ろう学校の子たちが明るくない、と思い込んでいたのはなぜなのか。そのとき、気づいたんです。偏見は、知らないということから生まれるのだ、と」

ろう者や難聴者の世界を少しでも多くの人に伝えたい。その思いから生まれた監督初作品が「めっちゃはじめてる！豊ろうっ子」愛知県立豊橋ろう学校の素顔」だ。

この映画のレポーターとして協力してくれたのは、近くの普通高校に通う男子生徒。彼は撮影終了後にかでろう学校に通う子をかawaiiそうと思っていた。でも、かわいそうなのは何も知らうとせずにそう思い込

んでいた自分のほうだった。ありがとう」

実際に触れ合うことで、偏見は溶けていく。それこそが、今村さんの希いだっただから、この言葉はどんなにうれしかったことか。

自分の声で伝えよう！

以来、夢を追いかけるろう者たち、ろう高齢者たち、大学や職場や海外でのろう者たちなど、幾本ものドキュメンタリーを撮り続けてきた。現在「夢編」「教育編」「人権編」「海外編」の四セットが、教材DVDとして販売されている。

太田辰郎さんに出会い、彼と彼を取り巻く人々を撮り始めたのは平成二十一年の夏の終わり。映画の資金集めなど苦楽を共にしたプロデューサーの阿久津真美さんに「ナレーションも今村さんがしたら」と勧められたときは「聞き取りにくい声なのにとんでもない」と尻込みしたという。だが、太田さんが自ら「声を出すのは得意ではない」と言いながらも、筆談やジェスチャーと合わせて、こだわりなく声を出す姿を撮り続けるうちに、気持ちが変わった。「私が感じたこと、私が伝えたいことを、私の声で伝えよう！」と。とつとつとして素直な、心地よく心に沁み込んでくる今村さんのナ

東日本大震災の被災地におけるろう者の現実を伝えたいと、ドキュメンタリー映画「音のない3・11」撮影中の今村さん



レーションで、映画は力みなく展開していく。太田さんが仕事師のまなざしでボードを削る場面に始まり、数々のあたたかな交流がさしはさまれ、聴者の若いカップルが「夫婦円満のコツは？」と、熟年の太田さん夫妻に尋ねる談笑シーンで幕は閉じ



る。観ているうちに、誰が聴者で誰がろう者か、そんなことはどうでもよくなる。湧いてくるのは「いい家族だなあ」「いい仲間だなあ」「自分の人生を大切にしてこそ人の人生も大切にできる」「構えをなくせば、人と人ってこんなに心を開き合える

んだ」という思いだ。

「店に来るお客さんたちはみな、太田さんを『ろう者』ではなく『アロハシャツを着たハワイの人』にそっくりな店長」として見えています。映画を観る人も、きっと同じ気持ちになるはず」

そう言って、今村さんは微笑む。

話したい、という
気持ちがあれば

この映画は、もう一つのストーリーをもつ。それは、今村さんの心の成長だ。今村さんは多くを語らなかったが、聴こえないことで、学校



自宅2階の編集室で映画の編集作業中



大好きなE.T.の人形がキーボードの上で手元を見守っている

でいじめにも遭ったという。「聴こえる人々たちへの『こわい』という思いは消えず、聞き取りにくい

声は相手を当惑させると思って、声も出さないようになりました。でも、太田さんを撮っているうちに、壁をつくっていたのは私だったと気づいたんです。太田さんは、聴者・ろう者関係なく、心をオープンにしている。会いたい、話したい、という気持ちがあれば、心は通い合うし、その人に魅力があれば人は集まってくるんですよ。窮屈だった私の心はふんわり広がって、出なかった声が出るようになりました」

「珈琲とエンピツ」は観る人たちの心もふんわり広げ、上映を支援する輪も確実に広がっている。

今、編集中のドキュメンタリー「音のない3・11」は、七月に完成予定だ。東日本大震災が起きた直後に、「珈琲とエンピツ」の制作進行を中断して、被災地の宮城県に入り、現地のろう者たちの生活を撮ったものだ。

現在、取材撮影中のドキュメンタリーの主人公は、一歳の男の子だという。

「父親は聴者、母親はろう者、男の子は聴者なんです。この家にはおもしろいルールがあって、家の中で使う言葉は手話。だから、男の子は、保育園では、声で、家ではお父さんとお母さんとも手話で話します。二つの世界をもつこの男の子がこれからどう成長していくのか、群

馬県に通って一〇年から一五年かけて撮っていくつもりです」

さらには、今村さんには、「珈琲とエンピツ」を海外の映画祭に出品して、「太田さんの生き方を世界中の人に覚えてもらいたい」という夢がある。

「映画の撮影や編集はじつはとても孤独な作業。でも、作り上げて観てもらったときから、小さな、架け橋がいつぱい生まれる。「大切なことに気づいたよ」「これからはがんばって」という励ましに力をもらって、前へ進めます」

自宅二階にある編集室のパソコンの上には、E.T.の小さな人形が置かれていた。お守りだという。小学校三年生のときにビデオで観た映画「E.T.」の中で、まったく違う言葉や文化をもつ宇宙人と少年は、指先と指先を祈るように合わせ、心を通わせる。今村さんの希い続けることの原点が、そこにあった。

上映スケジュール

「珈琲とエンピツ」

今夏、京都シネマにてロードショー。

<http://www.kyotocinema.jp/>
お問い合わせは

☎ 075 (353) 4723 へ